和漢文撰

諸類　解類
藏類　記類

六

八5
81
6

○論類

性利論

張昇甫

門ベリ9
弾
巻

和漢文撰巻之六

○論類

佛利論

張昇角

世人より酒のうつハ物を庶のたくさんとなく
てをるの風俗とせり是れ唐土の俗人を移の新き
とせり我邦の俗諺に佛利の思ひ為を知れり
されハ此物の世にもるるもへ聞こえ愛にてう飲家
より俗語の起こりて毒薬よりは人を害すること地を
さつてうの毒然不動のかたちをなして毒のきりと
なる

特へ5
81
6

そもそも名もこのうりそを付ねんさるに相とふ地い
かりも森こうへい院籍こはもれ翻てもこけい渕ぬ
こたはれく郡陸はよんのいとあること性利へ柳のよ
うつくまりて酒のはりとまつんいかり以やそこの宮
ありて氷とくもく雪とはらふ和い簾れたる雪に
法利をいうこて雪を相くれとてたこあま
ぬりまいそれ傘の行はまこれて和中けの内に
こんいもこれやこうに性利の業能を陽こん表の祝へ
りこさらこて苔のあ毛家のあ〻こ結こう
郡陸こりこそも市陸の業月こうれかはく

業人の業ゑてはれこれむりかけ屋のうまあ
れくあとこく亦相利こ時れたる歩野の法はこや
こうこうこやこうこへたり相こ組あこかこりめり相
こ対陸の業はあこく武陸の市こ書これこ時こ
蓼(コモ)かりの名こここ相こ元ここの言ものこもあこく
業こみこ痛の紙ここ陸のは行扇(ムこく)
ここもたること法利こ紙法郎こあこひこ世れのこひと
これるこり纐纈の林こ陸あの酒とあこり芝茶の
かおに茶会の盃こたくこれここ宮かこく大屋い
ここて三年二陽のこ貞月こたくこるこて関素こ航の

あれうを高おうしたれうを中ゝも如の紙ゝを南京
交趾の媚とかうり唐津佛法の名とあらはかりて
うて紙うちのあれ〳〵尼達のたうゝ美俗風
うり高ゝ郎のあうひうゝ新の調ゝうもありねやうゝ
▲買臣ゝ錦をうたうゝ高ゝ唐の心宗より
ちて餡茶の名と忘ゝ人ゝの指手あうゝ
て指と指ゝの色香とあゝうて婦まいさうゝの指
うゝうれる顔ゝ北切法の法とゝ高ゝ
○註曰△易繫辭寂然不動感而遂通天下之故　▲晉史
阮籍能存青白眼ヲ白眼ハ睨ム時ヲリ△淵明賦有酒盈

樽ニ云ヘ　▲武陵ト八江アノ市ヨリ津国ノ伊丹酒ヲ上品トスル船中
ノ女房ナカラ店ニ積テ女房被ト八新到ノ杵ヨリ　△白氏文集ニ
黄纈纈林寒ノ百葉ハ林間曉酒燒ノ紅葉ハ二月ノ春ノ花
入テ百ト成セリ△僧武故事ニ芙蓉ヲ敬キケテ通天基ノ上ニ
露ヲ承ル玉又アリ掬スルニ此一對ハ故事ヲ採リ古語ヲ摘ム轉換自
在ノ錦ト云ハン去ルハ纈纈ト芙蓉トノ連綿ヲ對セントテ基ノ字
ヲ錆綜セルハ林ト基ノ字對ヨリ紅葉ト黄金ノ光彩ハ言ハ
ス格ニ五照ノ絶妙ト称スベシ●岑參四休詩ニ三平二滿ニ詔郎
体ニ云ヘ三平二滿ハ顔ノ高低ニヲ侯語ハ婦人のお福也　△漢書ニ
上銭ノ朱買臣會稽太守ニ回富貴ニ不歸ハ如ハ衣錦夜
行ノ○休和尚ノ示ニ指示ヲいうこのかゝ〳〵ハ於ゝ
うる又上いうハ△顔以功德ハ念仏ノ結文ノ德ノ一字ノ結語ヲ

○頃、云は論を好み孫子を拾て相利のる事を論して
人間一生此業を以とはしるべきを及ばずして
いたづらに過るれば今言あるべきやまして注利の
名を實は世利の色を実とするべんこれを論の世折
もて設論の所をもとけるを

富論

岸倚義

いとへども読べつゝ月おもて業汁米の厨にて
神祇釋教を論じおもて出て世事をもて
人の皇のそれあるべきや神師もしくのまてね
はおもつらるいとよりもとの風俗師の

富とおもふる言葉あるべきや出の精ならずして
あるべ神此業を分をかべきるべきよみ燈を命とも
へてはるべきを意しあるべんと世事の富をおもふ道を
地教言の論をつゝしまず世をいさ鮮の酒のそれ月雪
花の言をつゝに屋敷の地をけきも月雪花のそれ
人のしるべ命をおよび遊ぶ業をもて系統の富をもて
きるべきかれ。稽書をはるべ人と世事をもてしたがふ
い我家の義此業を言はるべ人のるをとおもるべ山富とも
をおもる人の表裏をきるべきやはいべ人の風俗と
ふに月のおれ人をもとおもて富の家の油もと

みちしれる詩を老たる人の遊とすなりて侍りて連哥も此振
舞なくば月花の詠をもよまぬ一筋の俳諧をさとし▲闇の
詠とおもひてあしき人の責たるを見れば唐人の古めけ今此
爲にして廬八百の論とはなりしや
○詳曰△俳諧も升庵なども我の意を知らぬ人いへる事知し
一句よむもの此まほらかなる夜のこゝろをそへて云なれ中略非師よ
りし人の手をかへてねば我まつりごとよりとあり△おもふ事の拝に
あらし此事も高き都の煙りし人のつやなる袖をおもはれ
いふなり俳諧一句は言の葉ぞ○まことに我身にて稽古をあ
てはるかなる人の古事をしたひ△波黒忠ト八論語ノ取意ニヤ
顔回ト伯玉ナ愚ヲ悉言玉ヘリ▲闇夜ト八瓢ノ花生ノ名ニテ

跡先ノ知レズト云フ意ナリト然氏此論ニ八瓢ニ誤諧ノ名ヲ假
テ闇ノ一字ヲ寄セタルナリ花生ノ名ヲ称スルニ八非ストゾ
○評云此論を例のまぼろしなる月花をもてし闇の和
とあやまれ俳諧の作者をかくすへあらそふかの好色の
一段より二百余段の要をみよ儒仏の詞を翻釈して
俳諧一句の文化を世にしらしむる俳諧の気風と
写して闇の一論をかまへたるなれ古人の事ぞ御の語をさる
不足に詠まぬ連歌の余地をわかりて我俳諧の霊ある
をおもいて古今廬八百のうちに接続をすくる縁よ
談笑の訓練とはいふ一作家を岸中氏として越中
の芭蕉は俳諧をかりて書画に風流の名をとゞまって
こゝろ知二有と標の宗匠にて近年の変更ありけりと

不掃地論

東苑坊

我庵者非都之辰巳兮從本非爾所住心兮往時者任木葉之風而還月者涉蓬生之露則年兮月兮在程孝過柔松兮篠兮斯迄荒果止乎測明麼無辭于茲鳥矣今年者迎古郷之春而松者不忘往育之友麼浮世之道麼所斷許人不者彼謂高之松柔矣春者雉子之通巣居秋者山雀之尋塒而苦野之花麼更科之月麼捨此庭而覓孰国矣斯言則在世人之有面目者之山莊而爲似態佗我身共造庭不者不遣得木鐸兮直垣不者不知枝折結兮頃物迫事而不得已時者特右範東羽之棲鏑而不如養其日之老乘在共所謂苑甥之草因果歴然之喩事者打喰手盛之飯而息災也了伯父之事也乘我者好厭菓飯于霜後居慮欠歯于雨日則振麼蓑心於起即而嘲那思六箇敷乘矣兎成角成兮成心麼世者不有安今習所敬事時

有掃好之和尚而訪給我庵止乎都久〻
詠庭之氣色而世者不知無限物也乎我
者飽我庭之第目而此庭之更不雨而露
麼凉數萩萩者假令有暖暖野之奥共去
此不遠迚寔麼給此住居則至者尓我
庭之松風爲得手揚帆心地猿耶若夫人
情之令習迚物有好悪之変則人之飽其
庭之結構而有面白此庭之不掃地與我
者飽此庭之不掃地而有面白其庭之結
構面白意者五〻五〻共人来而十倍此耶

也則我往而百倍其耶也乎其意奉何也
則常求結構人者筆好紅粉之色則筆悪
珈珠之巣而雖自娛掃地求者皆〻了苦
耶自苦而厭人者可謂損之損厚哉君看
遊不掃地人者詠其身其伝之庭而厭我
宛厭人宛遊心之易遊了則爲得之得也
爲百倍之百倍乎或翁麼苟投此理而居
尋而交爲居盧而行實與所增而論禪家
之意地則往極樂者易了共遊地獄者難
哉哉和尚向何處去却墨而掛一向了則

月已傾西而秋色涼誘引縱横婦女我寺而
振舞雲上園之西瓜迚不捫敢橘尼之髮
庭向客人奚爾揚棚而不鎖例之尼戸而
折笑虎溪之橋而過矣

○註曰○花撰亦作花撰ハ八八ハ云ヘリ我ハ云ハスヒトハ
ちくさくさのをしまの花撰ハ
爾所ト書テ如斯ト註スレ古抄河ニ未明ナラスト貴稿
良話ニ此評アリ此等ニ大和真名ノ當用ヲ称スレ和歌ニ假名
真名ノ取違ヘ多シ△閑明帰来辞ニ之往就菊松菓
尚存○奥風ニ近ヒトシキ人ハ
のかなふくれ○西ハ

いろくさのなかにもとをれ △山倉山在ハ侵俄ニ在リ
定家卿ノ別荘ナリ△荘子養生主ニ緣督以爲經註ニ
緣順也督迫也不得已而後起也△世説伯父ト甥ノ
草ヲ刈ト八嬌家ト庶流皇報ナカラ渡世ニ身持ノ誠ト知
ヘシ右範モ東羽モ先師ノ猶子ナリ ○拾遺集ニ言ヒ
猶ノ子ナリ此ハ子ナリ
我者ノ起語ヨリ今羽習ノ結語ニテニ論者ノ老情ヲ演尽セリ
ト云ヒ姉庶蓍心ヲ於起即ト八倒ニ俗諺ノ雅言ヨリ歌人連
ニ子ノ艶詞ヲ取キテ此等ヲ大和真名ノ絶妙ト称スレ
△去此不遠八前ニ出タリ○須河ニ山ヲ
来リ
典結構ト八隠棲ノ典造作ヲ云ヘリ △土惠語ニ求八之皆古

△居看トハ諸人ヲ指ス詞ニテ禪録ニ數多アリ△或問ハ老子ノ
取意ヲ合セテ我家ノ名翁ヲ云ルニヤ白馬遺訓ニ俗徒中品以下
ヲ凡俗といひ中品以下の言ひとして中品以下の人とこそ
ひくと云ヒ虛實論ニ虛ヲ捨て實ヲ取ヒ一實ヲ捨て
虛ヲあらわ一〻ものと云ヒ此二語ハ實門ノ要言ナリト和尚ニ對シテ
我祖ヲ讃セス或問ハ時宜ノ文法ナリ△禪語ニ易遊天堂難
入地獄ニ按ルニ或問ハ下ノ二章ハ禪家ト佛門ノ意ハ共ニ競ヘ
タル論ハ此二章ニ看破スキナリ　△たれくせいてくにを
おうくまうくあり人ヲ誘フ詞なり△西園ハ直寺ノ裏園なり
黃山ノ弟圓ニ在テ書經ニ西園夢ノ殊言ナリトフ其後其園ニ
蓮ニ虎ノ別墅ヲ搆ヘ或ハ黃山老人トモ云リトフ或ニ樹尼
ハ白狂ト童名なり聯句行ニ其故アリ▲鬼溪△笑ハ峯ニ及

ハ又人軽ノ形容なり
○頃ハ云ハ論ヲ曲折深ヲとして虛實ヲ例の虛あり
いひむ徒もるかとく人間世ヲ好惡の妻あるよりも愛
ものとよ〻ものかとおとつりもれしもの優游とも
て又倫の人和と要とあるか詩家の實と称とはいへ
は論の和尚と比師とやはり行るの心なるかとそ
價家の實とおとあひうをを他門の虛とはいはる
のあるい敵ちらし禪家ニ這ケの把識なりとも

菖蒲ノ論

廣達支

人ヲ好といひ枯木といひ喜ヲ知ヲ知ヲ知ヲ知ヲ

かたくなるはのはたらきとして表敬をきらひ
来の敬をとらずやむことを世下と負袖のはたらきあれい
好樂の論をあるとあるいは今や他流の論義をい
人と豆腐のきらひをおもはれて菖蒲のもてなしい
まれあらずして武陵の義の遺文をも彼ら風新と
称するのこりなを実と豆腐のはらをいい淮南王の
お好より秋名の帝へもそれを作へるもはへ知よ
ふるまをもて所の名産をつくれる諸藩の
業をもとみていはりはなのむもきまをもとみとは
殿のものあるけまもあるふまるに菖蒲ふ和い

品津の中に心ふかれまもてあのわときらふもり
ゑ賞侍和の帝りの間をれ道ゑ和高の一稼下
まてんぬらの名とかのもりて世をあ侍時の法名
つをもあるまもしうにはこ行のい論と法を儒よ
論子のいるりとたまるて一新一等のるひとわもる
いにたのあの口癖まて康主のみる好事と
いひ大和の調まん和好をまね寄りてまへく
奇まりるまれい菖蒲の法名まるもあへ豆腐
の大名まもいるもへく行義の諸まて今
天ら代のたまるの作和と中をまは

献立の仕とあるてんされと毛

○註曰△武陵玄羽ト八芭蕉翁ナリ蕉翁風雅ト温飽ノ好色ト八白馬類説ニ祖翁ノ父言ナリ當時ノ俳集ニ其詞アリ再拳ニ及ハス ▲南陽雑俎ニ淮南王始テ鹽豆腐ヲ云ヒ卿類ニ出タリ ○江談ニ云寛僧記ニ和国ニ初テ豆腐ヲ造ル事ハ和尚ハ書洞ノ南山ナリ郁州ニハ我宗ノ寺ヲ建ントテ越前ノ永平寺ヲ本山トセリト爰ニ棒下ト八天不落ノ名目ノ禅語ニ似タレハ云ルニヤ △論語ニ一箪食一瓢飲回也不改其樂 △数奇ノ二字ハ和漢ノ通語ナリ接ス二遺稿ノ後話ニ数奇ト八漢文ノ好事ナリ長キ物ニハ短キヲ取合セ

圓ナル所ニハ方ナル物ヲ置テ物ノ数奇ナル故ニ茶人ヲ呼テ数奇有ト云ヘリ 隠言ハ小野ノ大茶湯ニヤキ雲龍ヲ掛タル類ナリ今ノ茶湯ノ折物ヲ見ルニハ数奇ノ字ヲ訓ヲ失ヘリトノ △家語ニ邦有道則出而行ニ邦無道則藏ト云ヘ

○徳ニ云ヒ偏ヲ例ノ諫笑ふ〳〵ことのこゝろ〳〵よりとしてあ一一陳ル人界の好ト楽ヲ例ノ汎諫ヲ云ヒ

ものれ〳〵うあ〳〵宗セ〳〵て平意ヲ慶宝ハ不自恃偏ヲ云ヒ言徳ノ理ト家ノ〳〵ふんさんの豆腐ヲ拵ルれあるい莨菪ヲ云ヒ花ノ理ト家ノ〳〵ふんさんの豆腐ヲ拵ルれあるかうこう義ヲ例ノ花ノ〳〵ふくれちるものいこに汎新ノ和ちるとつる

白和ノ二字ヲ和節ノ間ヲ〳〵ヒ〳〵と作ル為ヲ慶法ヲ〳〵て懐南ノ笠松

まゝ侍るも守分國の官吏なる何尾の毫釐をも交
をもまらし素鵞の里紅く信を通て當時よく文所くれ
凡ままありけれ

○解類

長芋ノ解　　室山流

薯蕷は漢土の書籍に蕷(ヤマイモ)を自然成のものとし俗名
ありとも山芋といふはこれを數多(ヤマノイモ)し山の蕗(フキ)との
ことまた和訓よみ山吹のさやあれもわかちんまるれの芋は
いま通りもありて山芋といひ里芋といひ自成化作
の差なのあらう山の芋を此ら長芋なりして作られ芋と

いふは作の名なり一しきりをいふものゝ月令よりも芋
の鱧となるといふよりも雷なりんてなれもおりて
も味もなくて賢とやなふはれらは市をもてる次を
伸を此洲町の潮舟まそまりそを八江戸の土間
てあらひて酒人をも秋の調はをきれは揺のよ鍋の
を覚をきてもなかく嚔とおでましもへもすとい
皆風る銘とありては餘とおりをそしもおあし鱧把(セイゴ)あれは
儒者は御なりは洗してぞいちしも今やは老師の狂言
ゝ於女のかの云を乗りもんより山芋の蟹をもち鱧
てあり為ん俗陳をいふよ方のあらんおもれてぞるての

きゝひろめ△法利と鰯と雲ゝ寺まゝ[illegible]
[illegible]ん[illegible]く万物の変化なり[illegible]
[illegible]大名の[illegible]
れ殷盛の[illegible]▲和[illegible]
みゝ[illegible]
[illegible]和訓の[illegible]
[illegible]の[illegible]
○註曰○嘉元百[illegible]
[illegible]色[illegible]
山ノ蕗ヲトヲ[illegible]
△月令季夏ノ[illegible]

キナリ △礼記月令ニ季春ニ田鼠化ス駕鳥ト云フ季秋ニ爵
入ル大水ニ爲蛤ト云フ ▲法花経ノ竜女成仏ノ段ニ変成男子ノ変
リ狂言ハ例ノ粉成ナリ △法利ノ鰯ハ隠岡ノキ貫ヲ云フ
軽口ノ噺ナリ ▲韓非子ニ卞和抱玉璞ヲ泣ク璞ハ玉ノ玉ト
○諺云ヒ解ヲ例ノ諺諧ヲ[illegible]
同名異ナル[illegible]
異名同実ノ[illegible]
角刀牛ノ釈文ヨリ[illegible]
[illegible]中間ノ鼓舞ト[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

屋霖解

得巴字

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たることゝ脇をかけて我をみることを楽むこゝ

○註曰△孫氏の人なり美にすぐれたる人をえたいとてあるこゝろ
いたきことゝ作おもてらひろ尽くもぬるゝ如して
ちゝゝしいたきあらせてらとあり ▲盧生が長夢栄耀
モ荘周ノ蝶ノ通運モ前ニ出タリ ○百人一そのおもし
ろかいあくまでむこゝろ有もれ
▲列子ニ黄帝昼寝夢遊ニ華胥ノ国ニ其後天下大治 ▲論語ニ
宰ニ予昼寝子曰朽木不可雕也糞土之墻不可杇 ▲車胤
蛍ヲ聚テ読書ノ古事モ孫康ノ雪ヲ積テ学文ノ事モ諸書ニ在
細筆ニ及ハス △論語ニ曲肱ノ樂モ前ニ出タリ
○ほこりけ解ゝと鹿宴の當用ゝて人を集ゝ
かゝゝゝて来ゝ人りのゝゝと長ゝ俗ゝの自在をゝて例の

人はとゝをきゝと称ゝ黄帝と宰予ゝと長孫
の好客と哉彭ゝて食後の一睡ゝ自己をよしある
れゝと解の解ゝゝ一作者を文選の作ゝ名孫
ありて物ゝの教ゝ

○箴類

摺小木箴

仙里紅

たもゝく万物万象の中ゝ摺小木ゝ子あり用も
おゝく耳もおゝれゝ用れゝ形のもゝはゝき用ひ
きれゝ薛の摺ゝ

▲渾沌未分のかゝち

より世月北用ちるはしてゑ一しうに海うけ海
きへいら蓼のはに肩といらくけめる幸の時光
とあやーて利まうもの北用ふれく鍋きもを時の
用ふんこに海ちはとと海さへたしえらの新炭
ちう大海りのお食ものはてはうこなたく蹴あるき
白みをもうちうこひ赤こをいうてあるのをきる
おわしをやられしに海のあれちるれに松の外
のうくさいうてをこひるもをの海ちるもたこと
ぬうにあて接乗いををこに海ちんけを海をを
雲月の北ちうに大海海をあつを衛ををのへを

の雲と都市木かうとしに海毎坂の四方の海を
ちうちうにおて嘘しあるはあれるはあり海や
をあ祖師の門鞠ちるちうを師のあとをかくを流れ
をあを憂石ちうかくうを仏孫にしををを
はれに人間の師を招山ちうて作をの坂を新ある
はを雲をかくをに和ちを変をあの人に招山はを
境界を分ちをちをはをむをを混ぜ流ちう
へをを比叡の山に所をれを接門の坂の四
をこうあり天狗の鼻の慢んをにへある時へ遊西
の弟富ちにれをちあるはを悟乗の鈴丁ををれ

て果を化はおくりきたりて一月とをたれ
ばかの笠とてそらしてかぶりてひくき谷をくだ
りて山とやうるるそもそもそなたもやうりと呼れわれを
こ界輪廻のうらもいつれの世にかたてしたれ
古人の箴にんのは孤とゆるをそなたを肥馬軽裘の
人とうれしく沙をいつも視ぶりてきたりし月にんの祇
〻〻うれしをんの幕にあるもの方さ事をものよ
〻くもあるをそこのもくもけんくいまうとにんのト帯
とをもしくをも

○註曰▲荘子應帝王ニ儵ト忽ト謀テ渾沌王之徳ヲ曰ク人皆

有テ七竅ヲ以テ視聴ス食息ス詩ニ鑿ツ之日ニ鑿ツ一竅ヲ七日而
渾沌死ス▲按スルニ此篇ハ渾沌ノ気ヲ赴面ニシテ始終文意
ヲ服客セル結詰ノ程身ニ眼ヲ看シ△忽ト緣辛ト云フ
ハ俗談ニテ料理人ノ口授ナリ▲大師講ト傳教大師ノ復
トフ按ズルニ其日ハ中豆粥ノ初穂ヲ摺鉢ニ入テ摺ル木ヲ中
ニ指入レ基所ノ棚ニ供フ此事ハ下様ニ起リテ諸国ニ色々ノ
品アリトフ○ちなみに云ふ此ちなみ所中ちなみ所中ちなみ所中
ちなみ所中ちなみ所中ちなみ所中ちなみ所中ちなみ所中ちなみ所中
序詰ニシテ此等ヲ領詞ノ絶句ト称スルニ△山焼訛テ山すそ
と山あそりとてしあり△論語ニ赤之適ニ也乗肥馬ニ
良ニ軽裘ニ云△訛テ肥馬ニ
元ル拙ナキ事ニ

○俳云此文ハ其角風の一格にして其そ俳なり蛇足と
謂ふべしかしこにも柳樽の句つくりなると好色の
二字を形容して蔵のうちに文を隠せる意を
隠見の秘法といふべし夫を例の其角もつとも
あるべき風の俳諧なれ祖師ハ其角の俳とよせし人
間に師の徒の俳と此をいひて其角も貞著とかくして
あるにさへもまた例に談笑の説法ありけるを諷諫の
絶妙と称すべし作者ハ西濃の北方にて庵して
仙石を氏とし黄鶴園と標せるを称子門に
授記のうる果なりけれ

蓑暮蔵

渡吾仲

示翁の中比かりたてたることゝこゝろよりあつて歎くべき中也
竪しあれりけるを郷ちかしといひて舞ふべしと
の氣類なりんすこらにもゆへ其玉數を錦如くまとめて
喧嘩とまとくしあれこれとたてるとの洞察ありて
かしこまりて恐れを抽んでて中中或ハ山谷の詩まで
作れる。唐學鏡を集翁の菩提落ありける浪花妻姑
又もいひ文波右ともいひ想思州を渡して長命州
ハ講ちかくし和訓を獻事の畧諸ありけるかな
まてく漏る和歌をひいておひてはそりは偏る頌のことあるや
儒仲のおもしろさをよくよくわきまへた好西の人の言ふにてあり

やしなひ養ふ事の有さまはさてはらとも有ていひ
みを酌るとよるとこそ茶をきく●盧仝の詩
に新て住宮こる家のれとうせん法人又古の眠
とちはとも茶の子とも茶の地の有さまはいひ
て頭をやくとも茶と言葉とも地いむの咲
はの旅さも面のあるおの所さも粉とも又
地物とも茶とも有しまてとも茶とも
こと古和とも茶とも有しけとも茶とも
▲虞寿人の名とは▲宮こ茶とも北狐人とも茶地
のとも茶とも茶とも茶人とも茶とも茶とも

やるはとまはとくせうはあやまれはてはは比の風俗
とも人長服部和泉の二ふとも又寅七月の風
とくこはてとも寿とあるとへとへ俗とえへいふとと
おはとけの貢物とも有とも寿とも有くは
ふく男女の井とやりけ遊女とは有とも
とあるとて又蓋の物とあるけい寿とも荷の寿
とこの▲寿宮の所の中とも有とも虚所のきとる
のちとうとも陳宮とも付とも付とも深とこ
いあり此所の浮世とこと有て笠一かいの物
とも。江戸の笠のかりの方とも寿ちのきとこと

○富士の煙ゝ[illegible]

○註曰▲世說王敦每醉後以如意擊唾壺歌之云

●山谷瓊玉之軒詩註所謂君後安鏡侯朝之宴落也

△漳州府志ニハ淡婆姑ト有リ△羅山文集ニハ多波古布施事トアリ此白豪語ナリト△本州洞詮烟州或想思州也云

△文選三伯倫ヲ酒德頌アリ茶ハ又ハ△漁隱後集ニ盧仝茶歌アリ茶ハ又ハ△茶ト酒トノ好惡ヲ云ル三酌取ノ名言ハ常ニシテ[illegible]

俳諧ニ渡文ノ勢ヲ假テ詞ニ千里ノ野ヲ擴ケ筆ニ万里ノ地ヲ縮ムト云ル文ニ形容ノ絶妙ト称スレ

▲嘉人州ノ真ハ前ニ出タリ▲定家蔓ノ古真ハ訊ニアリ式子内親王ノ執心ヲトフ

▲吹笛園ハ玄宇ト貴妃ナリ其詩ニ即推指貴妃吹云々ニ即ハ玄宇ノ稚名ナリ ○[illegible]

といふ事てそとかくうらやかりの名とらとかりもいはれけ○あかりぬ
富士ニ見ゆるひくらの猿のさらまちてりまきしたるね
ゆかりのいけ△無心所着ト八和哥ニ論方ノ一躰之△梵網経
八持戒ノ御法より挙ルニ及ハス△家語ニ八辨物ノ篇アリ物ノ奇怪
ヲ記セり　△論語ニ酒ハ無量不及乱ニ
○注ニ云此文を劉亮躰にしていひて若躍とも云へよ
まやまれをも猿酸まつりてみかり法師のかりの猿ハ宍く
又はこの富言葉のせんたいの作手をのせてこゝ哥の様を
おもし此文の用ををしるこれを托物比喩としいて
せずの用をきるできとぞ

猿蔵　　　僧一空

あらめでや猿ハ山王のつかはしめとて花さく奥山
まなにもとゆへにて○なこに若猿の名をかゝふり
不のきさて孫子の様もさらえて木の実ハ猿とても不
あらすしけて五月の弥山まつ農業を秋の蔵
を採りし武士の待厩をまもるより△十二支の神
えらびれてえをさへやそるとて猿ハあらしまされ
和漢に名をほとんて詩ほ流てり哥によまれきむ
それの中にも●巫峡の暁に詩客の腸をたちしもん
より木曽の山中に人をよびて哥人を仰ぎさせしハ
○せうらうを猿都意の中此かりしとやいふむれ
ぞり

四の中をうろうろして本のもりに行とたゝへ聖の猿
をはなして腸をたゝきけるに猿はなをぬきて頭へ
かゝり△はなの穴をふさぎて死むく
ものをたゝへいかりたてゝ神宗の中にいたりて
△六雷一猿の中をたゝへてもちゐるのは
かゝれかゝり刀を抜て孫の冊おとをあり抜て其ゝ
とゝらふ盤に抜をのゝ抜て鉢をのあ
ふさもものらんれてをあるをもつ鎌倉
にをゝて猿おのゝ名をゝゝれ抜の首板
にあつもおて行まのへ知られへりを作れる

庚申の日くゝ行ゝて祝さる聽さるを陪ゝ陪ゝ
ゝて言ゝゝ△伊川の宮用ゝ言ゝあゝ
へゝ行ゝゝゝゝゝ俗信の自ゝを言ゝ
○註曰○朝詠記ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ△十二支ハ子丑寅卯ノ十二名ヲ云十干
ハ甲乙丙丁ナリ
●巫峽ハ猿ノ名所ナリ斷腸ノ詩ハ數度
アリ舉ル三反ハス○百今集ニとゝもれさゝきもゝね
山中にわゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ニ三身ノ傳授トヲ云ルハ俚諺ニ稲負鳥ハ馬ノ右又喚ス鳥ハ
猿ノ右又ト云ル信談平語ヲ改又ハ例ニ狩家ノ意地ナレハ
其所ヲ化諧ノ面通味ナリトヲ △後語拾遺ニ猿ハ心腸ノ
火ナキ故ニ手脚ノ働ヲ失ト成セリト△傳灯錄ニ僧問如何

得二見性一師ハ譬ハ如シ屋上ニ有テ六窓内ニ有二一獼猴一云々 △二程全書ニ 視聴言動四箴アリ伊川ハ程正叔ノ標号なり
○儒云けん命を虚中にちらしはりて箴のまとをしるより
いふもさらなり人間の世を辨しわけて自己の本来を
失へるなりより要須の箴なるをやさらにも伊川の四箴
を献して俳諧も言語のあるになるをとることは言語
言ハさらにも人天の両用あれはしかるにおもひて言語
の要をとるもまたいはれなり一字録の遺訓なる作者
ハ周防の岩国にありて宇治の麾隠に随ひて詩文
ハ宗匠の由紹をもて師として邂庵詩集ハ義用の名ありと
生海鼠蔵
長鷺洲

世は不觧甲と弟をとかるひ羽毛に客とかゝる扨も
千程なる人もあるとおもはれて人間の元なる
とゆるこの人にかくなしてきまおもはれとおもはるゝに
生海鼠とは不抱をいふて海底と成りはたらきて
元会を求めて身まろ書のむかしは秋の月
ちかよふ山路とへの市場をさそしてきた絶のさを
とやいふむやさとを俳家の俳諧に○大海とやらし
かしも知は誠とせと叙の頌を称されしかしも
○もちのくれ倶は花に寳のくれ似ありて生海鼠
の俳諧をいふあれるよりかの海底の海にあらはれ

△雑物の所々に行うれて拜物を綿の朝鮮にて
串海軍桁海軍の名とあるとへりわて所の法と
えてかつこに海苔の名と称されたりと朝鮮人の
つも價をあらそふ〳〵そもそも今頒綿とは
鮮〳〵〳〵みわてかつこのあやとも　英国〳〵蓼の
いさりにたて昌牙は海軍勝の猪にしむこいれとん
蓼麝の毒〳〵やとこりにたりて〳〵祈蓼も云ふ
めてそて又後ちに後の法て山等の部〳〵入れて賢と
ちさ〳〵ふ加茶と云〳〵〳〵ちうを色ちの〳〵北ちと
のしおされて△梁の惠王ちうを法とは所と再わ

の宮ちかちうの名ちもとちとちとのこ
ぽ毒の名ちも沒〳〵ちと毒北ちとそて法〳〵
梅のもの所〳〵〳〵ちとはいはちふの毒とけ色一ち色
う〳〵北ちあ〳〵ちとわちとちとやちうはちふ蓼
とちとは蓼のあ〳〵ん〳〵ちりちあ〳〵ちとわ〳〵
ちむはちふ〳〵の誘〳〵蓼豆〳〵国と傾〳〵て
さて好色のさ〳〵ふ〳〵れと法〳〵傾国の兆あれ
れちの訊諫〳〵国とちは〳〵ては法の法の藏とちうへ
ちうを色

○註曰○海軍〳〵發句八湖東〳〵許六作ちり○万葉集〳〵てちきを
はけさ〳〵〳〵むとあ〳〵ちうちちの〳〵ちを色ちく△海塩縣〳〵

河内ハ周頴ガ作隠ス海鼠ニ海塩ノ富ト知レ△能登ハ海鼠
ノ名産アリ海茶ハ千ヒテ刻ミ物ヌリ▲戦国策ニ易牙ハ齊
桓公ノ臣ナリ百味ヲ知テ料理ノ名人ナリ▲神農本草ハ前ニ出タリ
△子華子ニ管夷吾ハ君子遠庖厨ニシテ▲白居易ハ宮中ニ蓮ヲ大将モ源氏
ニ好色ノ河内ニシテ早蕨ハ海鼠ノ香ニ匂ヒ立蕨ト富ニ言ナリ
○宋玉ガ高唐ノ賦ニ山の井ハあさくしてあるる人を
ふかしとし△梅の実ハ酸ヲ以テ調ル調味ノ料ニ用ヒラレテ
俳諧指南ニ梅ハ国傾ケ礼ヲ和ス節分ニ用ヒラレテ
○俳諧ニ云ク蔵ヲ御徴の二用トカヨシテ姫ヲ大臣の酒屋
と称シ中ヲ隠ス者の茶類ヲ云ヒ一説ニ月ヲ放
ほとゝぎすしむ山ヲ茶ヲ煎ル者ハ月ヲ適の
道遥ヒ山ヲ又茶ヲ煎ル者ハ花ヲ愛ス

と紙貨の筆格ヲ以テ鹿実の蔵ヲ求メ

○記類

紙衾ノ記　芭蕉翁

たゞ一ヒラ〳〵たゞ一ヒラ〳〵ぬれて来て蛇ヲ殺ス
ヒラ〳〵ト云ハ衣ヲ指テ云ヒ紙衾ヲ指テ云ヒ
紙ヲ寒ヲ防ク為ニ用ヒラレタルの上ニ
ヒラ〳〵ヒラ〳〵ヒラ〳〵ヒラ〳〵ヒラ〳〵ヒラ〳〵
らんとや思の一物ヒラ〳〵ヒラ〳〵ヒラ〳〵
い紙の物ヒラ〳〵ヒラ〳〵ヒラ〳〵ヒラ〳〵

[illegible]の君といふこゝろ歌のいふやうをこゝにいひ
[illegible]の国[illegible]にてあるべしとなり
越後の浦くに[illegible]の拙のうへにこゝろあるべ
[illegible]とやうにて蓬りてらにたまはるべ
のきるとくをかけてこゝにて[illegible]
こゝの余つまに[illegible]とにてつ孫とまろくして
[illegible]国大拙の産[illegible]
貪欲の拙とやゝるこゝろ[illegible]

○註曰●長恨歌、翡翠衾寒誰与共、唐詩解三回食
故拙ニ作ル●文選詩文絲改鴛鴦裁為合歓被

●西氏文集ニ五月中新月色二千里郊外人稀人少
きりぎすなくなり[illegible]
○[illegible]
と[illegible]伊勢の[illegible]
[illegible]行[illegible]
の[illegible]路通も越人も記とかゝて行[illegible]
とゝ[illegible]

何尾亭ノ記

井立室平

ここ[illegible]一把の草庵とかゝ[illegible]
[illegible]と[illegible]世界[illegible]

さきまく高家のいとなあるけるを市中の童とかくは
つ色はるを藤家の辰巳ふうゝせとらゝはらゝを
あれもくやるあつ稲葉山の林下ゝてかも色と
さるる百歩はうゝ茶ゝあるふんは指図とりてゝ
はてまに曲床とはをて勝をを二夏のあるを葉
あれい姿婆のたゝりはをを火も漢子をは
かゝゝはをふ喜ゝを忘ゝれ窟ゝかけはい蒲
の寺はゝくかも立をを葉のもは尚ゝはゝおてはを
ゝ邪ゝを仏教寺も一ゝ二ゝをかゝゝ
界の山吹も堤の立人なくも我をあさゝは名を

愛ゝて二ゝ来ゝ湧ゝ古風とあさもをも人を山なの
紅葉ある事と同ゝをはて山寺の風もはよあをを字
の西北事ふゝ色のあをひをもるはをゝはゝは
山ゝをれとんをゝ所の奥ををとゝてけゝ世信と
をゝをれゝるんはあゝんはれゝ貴ゝ山の使ゝををて蓮二
の所ゝ房ゝはをゝ石をを求ゝはをゝ何ゝふく何尾の二字
と頭をゝはをゝ稲をふの山もゝをれはかのあゝの言
は事風も何れの尾ゝゝとはやゝゝはゝをゝ
のはゝゝゝはゝてあゝゝゝを素盤の言せゝゝく
根本の利用と求あゝゆゆ金ゝゝ本魚の有はゝ

未来の因縁とむすびたる毛尾を怪しみあふ
何の尾ありのもとゝやらん何とうたがひ
うしこふ稲荷の使やらんとあらぬ狐とさわぎの尾と
かりてあるけるやわらのを信とあてゝ△甚布に
山椒の古風あれとうたてあをてゝ
茶菓子此茶菓子の地あらしめ人を疑れ
あるひは狐の掛をいとの狐あらうなど
も宮もある茶人うゝて世界の人ゝ
もり作もあく茶あもふれい何の尾もあき地まれ
うゝてさく山さにあるふりもかるのきらあれちら

狐と我と茶人も他人ゝも他人ゝて後世を祈ふ人とも
山尾とゝあれ人ゝをちらゝ祈ふちらゝ命
○註曰▲仙傳ニ右五云ハ前ニ出タリ○右撰ニハ前ニ出タリ
△古ノ竹ニ嘆ヲ寄ル歌ハ前ニ出タリ返魂法ヲ知ラスト云フ
ある人接スルニ此ニ奇ハ世外ノ人ニ居ヲ云ハントテ婆娑ノ二字ヲ
云イ起シ嘆子身ニ返魂ノ意ヲ結ヘル詞ノ鎖ハ更ニシテ
此等ノ躰ヲ論セン云ハ無心所着ノ絶妙ト称スヘシ △渕明カ
菊ヲ愛セシ古人ハ細筆スルニ及ハス接スルニ此事ハ花制ノ花ヲ
ト云ハスノ前ノ名ヲトヽ云フ所ハサ制ト歎トノ御音ヨリ無理ニ
古人ヲ称成スル意地ノ屋実ハ云ニ知キナリ ○茶好ノ御音ニ
うゝもゝく浮世ある人ゝ
もゝ分 ○尾茶作集ノ尾の者ゝ茶のれぬかゝあゝ

ともりたる人をあらそむ　△昆布ニ山椒よいへ茶とよきふハ狂言ノ釣狐ニ伯蔵主ノ詞ナリ按ルニ狐ノ柔団子ハ専ラ薫ノ香ナリト臺部ノ音曲ニアリ彼物トハ隠見ノ法ナリ

○誹諧は記を虚実の當用ともむすふうち何尾の二字を秋まるに末了る歌人の艶曲に敵し末ニハ茶人の風僕をこなしてなをならて俳諧のきを述るも作者を宗としあるハ俳なあるハ儒佛の道に殊なりて自己の名利をうちゆゑし他人の内證を發（アバキ）さる事なきとて実の字格ありて樂るへきもの虚実の塵實あり作者の姓氏を文經にありてなよう撫子門の先折口也

二方楼記

桐龙角

此楼を二方とて小半を山とむかひあふきのかたちにの△大観なれハとさるにあかしはま雪をなが△あるハ風雅をあくらとれて輪て常ともあるれときよふ此子をは求る石とれとなをに風雅をあくさむ所をもふの事に鄙の遊ふんとあそひ前ててあるに又人の見もあれハ入るに又人の中ならり皆をし盃もあそふ下戸にもひらうし酒をあれとふいとあしいまや茶碗の一盃をあもせうかの楼も△目もてらて灌の流れしおほしも。百さて中も俳諧て大悟の場もつくりて△蜈蚣と頭陀を此の来もこ論をさ

襄陽を言ふの意あり上に仙樓の西南に接
する山は一味の優雅のあんや文章二方の
とあらむ

○註曰岳陽記衡に遠山を吞む長江を北則岳陽樓の大觀也
今作竹月菊を用て又ひらかな耳
○おいらかな耳
○諺云代記を著作連俳の盧家と
二豪侍側乎如蝶齋脚下頓首
俗偏用徒頌
なるべきなり
西湖とまるべき芙蓉の接和と品して茶碗湯の
作者を江の湖南にあるべきにはけを佐の相川を佐り

と文徳とをの姓氏ありて和漢を通称の文人多所

壺中園記

東花坊

昔々遊越之新深而頃有水無月之半端
世東竹莊迂暑日則鑑亭迎涼夜歴不尤
有而磨江山清絶之地而謂不有之風雅
處上矣或用者遊蓮咲寺而孟徒十六宵
之影乎或遊者泛月涼敷江而船遣二千
里之心乎其友有名渠于詩乎月出于歌
乎謂風流使人醉矣年我旦漂其地而中

来能諧之人則独有龙角之男而年未及
二十歩于無知渡世人之実而識遊文月
之虚了則出而有染花鳥之色而教曙公
之千金舞写入而有澄月雪之心而盡顔
子之一瓢佗写奚爾則我家之俳諧而斯
者遊虚空乎見綴希有之男哉共其須者
若了則思置筆南事来矣其後過十年了
共不聞其人之行末則龙在那所覚龙許
社止乎此頃見雲鉢之状則仇復之浦山
陰有和漢不思議之壺而覩則有月花之

別世界與哉▲況時假同連之遠同鏡而近
是寄万里之情了則誠哉園林備四季之
花鳥而其口者▲呑雲夢之八九写其胸者
適▲蓬瀛之五二写況夫▲黄金之花咲了其
国之山副近了則花布者不待▲初櫻之春
而月雪麿忘▲紅葉之秋▲帛矣言則飽▲菓珠
之八珍而▲尊▲侍▲鬼車之二會乎其筆者騒
人雅士而壺中之主者例之龙角也来

○註曰竹在八慈竹亭す鑑亭八七里別観す何モ新
浮元騒ノ名アリ●白氏ナ二千里八前三出タリ●司空曙道

妓詩黄金用尽教歌舞△頌子ハ一瓢ハ前ニアリ▲玉蘭
盆経ニ同連ノ夏アリ今時ハ其経ノ熟語ナリ
△上林賦ニ呑ニ雲夢ノ八九ヲ胸中ニ蓄故ニ▲列子ニ方壺瀛洲
蓬莱等ノ丘山アリ郊祀志ニ之属アリ何モ仙境ナリ
○万葉ニ黄金花ノ歌ハ前ニ出タリ▲忘第珠宮ハ仙観ニ常
二八珍ノ美味ヲ供フトソ▲弥勒下生経ニ兜率内院ニ在ニテ之
會ノ説法アリトソ梅ス之ニ會ハ仏諸ノ會席ニ詞便ハ
○便云ハ仏ヲ文ヨ婉曲ありて語ヲ云ハ名説ヲ云ハ
ヘ云ハ姑ラヲ云ハ質ヲ称ハ中ヲ此蓋の
由来ヲ記ハ終ヲ結ハ
い人境の蓋用ヲ
ヲ園の快楽ヲ
ヲ記中の
一瓢ヲ

慧々庵記

土方以立

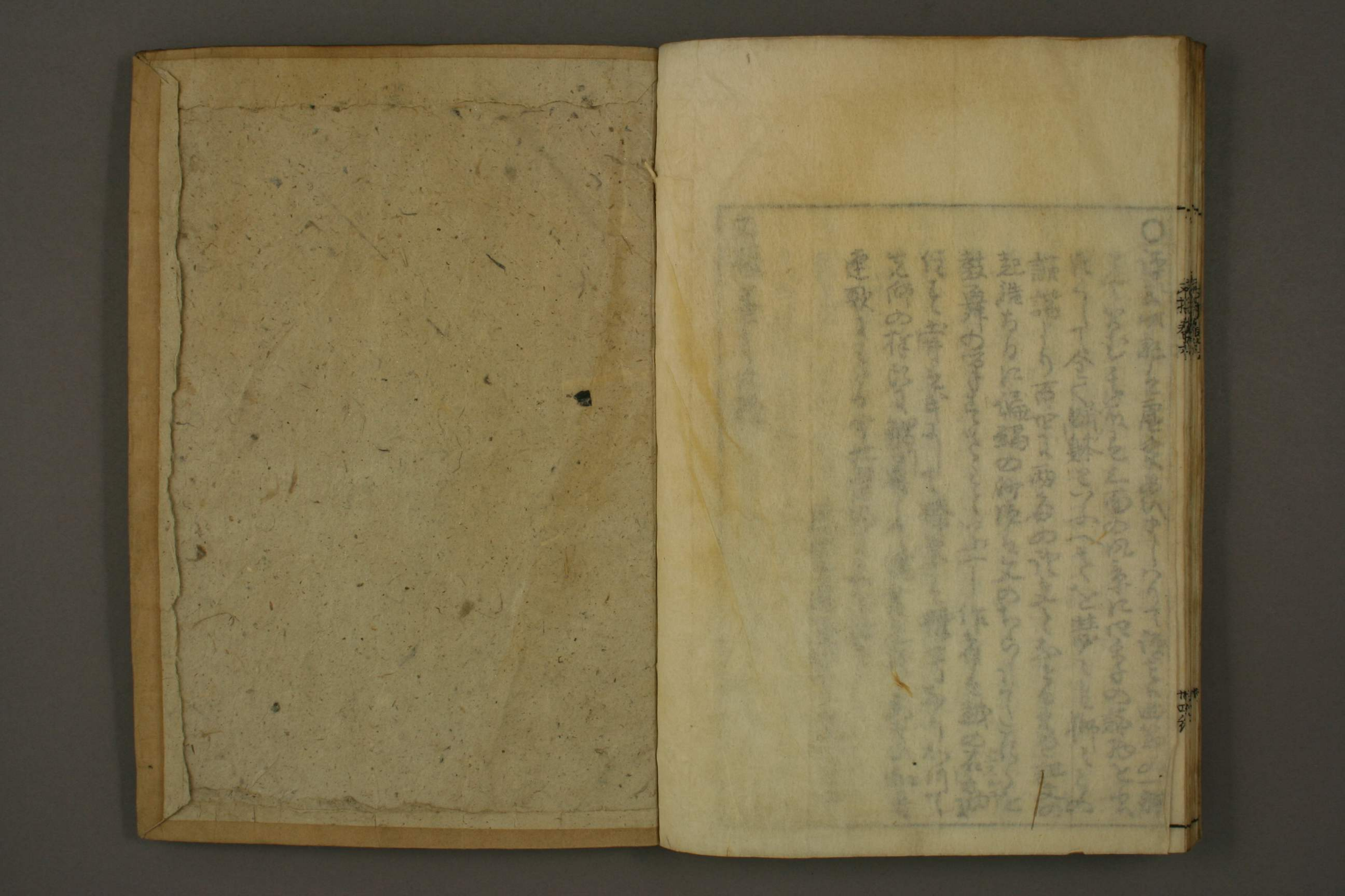
紀世音寺ハ西の京一ノ所ニアリて石塔
の不動尊とあり毛山ニ菓く慧々庵
ヲ媚して慧々庵ヲそりたれいけるを而
ひとして越の風ハ山とんかろと一脈ヲ中ハ
風景ヲ此ニあるふるふるを栗程の山加
ひきおて言ふ▲凌雲摘翠ハ眺望
としひとりて来ル西面の華表ハ青毛
の芝ヲ高ク云ハ東郭ヲ素御ハ耶ル不おく

わらを俵あるいは藁の苞に表のかくれぬ所へ天蓋を木綿しけの用ある〳〵はて仲竜堤の意をうををくるあふ立山もあるかやを雪の広狭を居をのををまふこをくい俗利巡屋此等に作るありて布也や御俗の山くも井ほを持ち此とくまきに書校の色をえをうと掃帚の清をゆちら〳〵をを。雄神川の流をとく小波部を用のてに布引て。言風をを和のをく言をををうを縛をををわをまをを山ををいにを者ををかを。岳陽をををら〳〵をを嘉を採所の山ちを

をを百姓をを此をををを作りをいをを小をを此をを此所をを行て沈田の沢をを竜をををををを拾板山の石を秋をを
にちを〳〵沒や。新米歳の月のををを義をを人の人此
等をを立ををんをを作て雪の日此をを立ちに沈をを山をを
をををををを食て越後のをををを麦を新川（アラカワ）
此所をを山をを此所をを弱谷の栗ををを乳色
ををに和漢をををを作る〳〵をを我国此様をく
此をを蓬二唐の等をを作をを作をを俗をを石菖
ををををを名をををを酒菓ををを酒菓をを言に文操
ををを行をを考をを此をを榛菓を例を和漢の稽

△とさらし蕙峰と詩書の便覧にたとへて文とよ
五車此史ノ合とありて韻する獅子巌屋の三字を除
膝方する理屈の人入らもとしかの△畢鉢羅の鑰と
ちまそて行する禁悍の石と云ふハり七字の伽藍の
躰おちる局しきるにも寺此見るる句ハ慧とく
たるをむけりて売く庵くとハふあれハ△彼記
よるる趣向の獅子庵して宗の怖る人慧ふと居
とハれ俳諧の附るる獅子庵といひておほやけさて
らし此二名をとりて号へいちもしもよろしく嵐るりよろし
くあるにも鑰鑰のあるを知まちそて自在鑰とやいふ也

○詩ニ曰△凌雲観ハ魏ノ明帝造ル之ヲ摘星楼ハ在リ淇県ニトフ眩暈
上ハ西都賦ニ月眩轉シテ而意迷フト云々△史記ニ東郭先生貧困ニシテ
履不完行ニ雪中ヲ履有テ上無シ下足尽ク践ム地ヲ云々△晋史ニ天運
木ニ寝ノ事ハ前ニ出タリ○流れの音ハ数度アリ峯ニ及ハス
○雄神川ハ万葉ノ名所ナリ歌ハ峯ニ及ハス○ちる流舟ノ歌ハ
諸集ニ多シ峯ニ及ハス△岳陽楼ノ江山ハ前ニ出タリ
●文積詩ニ蛍火乱飛テ秋已ニ近シ●陶明詩ニ白日淪ム西河ニ素月
出ツ東山嶺ニ△王毅白玉上ノ高郎ハ前ニ出タリ●杜偉盤ニ剥キ白鴉
谷口ニ粟ヲ飯ス煮ル青泥坊底ノ芹ヲ△乙丈ハ諸書ヲ暗記シテ
異名ヲ五車韻瑞ト云ヘリトゾ△大論ニ畢鉢羅窟ハ仏経ノ
選場ナリ阿難ハ迦葉ノ命ニ依テ鑰ノ穴ヨリ入テ五千余巻
ノ撰者トなりトゾ此筆ニ撰集ノ内證ヲ寫スヘシ

○俳云爪記を麁言あしまじりて俳はをハ曲節の一躰
とや名むしを石ると三百の風象にハ季の詠物とも云
たくして全く賦躰と予ふへきと楚ふと郷しとの
詼諧より百世に両名の論文と称する家と記文の
起諸ちるに論語の河法を文のちらしてこれ杜と
鼓舞のなまさくことを予一作者を越の石清功に
俳を嘴を民よして棒筆を標号ありかりて
先師の指沢に解着して儒書を経にあちハ和音
連歌をまさる今此選歩に名を称せハ
居林梵通美の人と予へしこれ也

文操巻之六終